

## モーリシャス豆知識・小話 第13号

2018年5月  
在モーリシャス日本国大使館

### (1)モーリシャスの特産品：サトウキビの彼方に



サトウキビ畑

モーリシャスと言えばサトウキビ！ちょっと郊外に出るとサトウキビ畑が延々と続きます。田舎道とはいえ舗装されていて、ちょっとした木陰などがあり、出張で来た邦人などからはまるで沖縄にいるみたい、との感想もよく聞かれます。両側に背の高いサトウキビが生い茂る道がくねくねとどこまでものどかに続いているのです。しかしご注意ください。私は先日、夜中にこうした道に迷い込み、そのうちどこを歩いているかもよくわからなくなりひたすら畑道をウロウロするという悲惨な目に遭いました。

いずれにしろこの国特産のサトウキビではありますが、最近では国際市況も低迷し、ブラジルなどのライバルにも負け続け、もはや主要産業とは言えないのは周知の事実。政府は農産物生産についても多角化、差別化を図ろうと他の商品作物への転換を模索中です。しかし、何があるのでしょうかね。カカオ、コーヒー豆、バニラ、どれも少量の生産でマダガスカルなどの隣国には及びません。最近ではマカデミアナッツの栽培も始まったようですが。

でもでも、よく見たら有望な作物はあるにはあるのです。ヴィクトリア・パイナップルは小さいながら甘みが凝縮していて、ロドリゲス島ではライム、蜂蜜など、高品質なものを生産しており知る人ぞ知る特産品です。農産物加工品では、当国ラム酒は有名ですが、年々品質が高まっていると邦人の買い付け業者が言っていました。私が帰国時にバニラティーとともにお土産に買うのは、マニョック(キャッサバ)を原材料に

したビスケット。チョコレート、ミント、アニス、バター、シナモンと、いろいろなフレーバーのものがあり、ヘルシーかつおしゃれな朝食に最適です。特に女性に喜ばれました。



### マニョックのビスケット

こちらの人はまだサトウキビが頭から抜け切れないのか、モーリシャスのお勧めのお土産は？と聞くと、缶や瓶に詰められた砂糖をドーンと出してくれます。確かに無精製のいろんな種類の砂糖は味や栄養もバラエティーに富んではいるけど、これだけではねえ。せめて砂糖を使って気の利いたクッキーやチョコを作ってほしいものです。

日本人の観光客をお土産物屋さんに案内しながら、そろそろ脱サトウキビで、海外の観光客が思わず手に取るようなお土産のブランディングが必要なときなのではないか、そんなことを感じました。

### (2)ディアスポラ・モーリシャン

この国の人口は約126万人ほど。小さいです、はい。しかし、英仏語ができるのが良いのか悪いのか、それが故に海外留学、移住などによるモーリシャスのディアスポラ数は、人口に比し想像以上です。統計年は各国ばらばらですが、だいたい2014年～17年期中で、英に4万8千人、豪州5万1千人、フランス4万5千人、カナダ1万1千人、以下、イタリア、南アフリカ、レユニオン島、米国、スイスが続きます。ちなみに日本には2017年12月現在で84名の在留モーリシャス人がいるそうですが(当地在留邦人より多い!)、永住かどうかはわかりません。

学生は、特に優秀な人や富裕層では、海外の大学に留学しそのまま帰ってこないというパターンも多いらしいですが、最近、ここで商売していてもどん詰まりだからもうカナダへ移住するという床屋さんもいました。つまりは国民各層、その気になれば海外

移住する、というのは我々日本人が考えている以上にハードルが低そうです。もちろん、行き先の国に既に親族等、モーリシャスのコミュニティーがある、というのも要因として大きいのかもしれません。

移住の理由は、ここに残っていても職がない、というのがやはり大きいようです。2017年の失業率が7.1%、15歳以上25歳未満に限っては24.9%という高率です。他方でこの国は、バングラディシュ等から大量(年間約23,000人)の契約労働者を入れています。特に繊維産業、建設業ではこうした外国人労働者無しでは動かないと言われていています。実際、人手不足でビル建設が遅れる、ということもよくあるようです。

このギャップは一体なんなのでしょうね。つまりはもはや、モーリシャス人は3Kの仕事には就きたくないと言うことなのかもしれません。しかし、先進国を目指しながらも中進国の罠にはまろうとしている国が、そうしたことで果たしてやっていけるのか。人ごとながら非常に心配です。それに加え、現在当国では少子高齢化が進んでおり、担当大臣からは日本の経験や知恵、制度に学びたいという声も聞かれます。

一見豊かに見えるアフリカ随一の所得を誇る国でも、いや、そうした国だからこそその問題なのかもしれません。きっといろいろな政策や取り組みが必要なのでしょうが、素人目には、精神論かもしれませんが、愛国心、つまりいかに自分が国をよくしていくために頑張るかという気概に溢れた若者や為政者がもっともっと増えることが一つのポイントなのではないかなと、モーリシャス特有の心地よいトロピカルな風にたなびく独立50周年のロゴ旗を眺めながら考えました。

